



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	Acquisition of English Noun Phrases by Japanese Learners of English Investigated through Sentence Repetition Test(審査結果の要旨)
Author(s)	SUNADA, Midori
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2309/149108
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか

言語習得において名詞句の習得は極めて重要な意味を持っており、様々な構造を持つ英語の名詞句の習得についての研究がこれまで行われてきた。しかしながら、これまでの名詞句習得研究においては筆記によるテストが用いられてきており、筆記テストでは、言語習得の根幹である暗示的知識 (implicit knowledge) の習得を適切に測ることができないという問題があった。言語知識には、言語の形式や規則に対して無意識的・自動的に言語運用する暗示的知識と、それらを意識しながら処理する明示的知識があることが広く認められている。そして、言語の知識・技能獲得においては暗示的知識の習得が目標であり、また第二言語習得研究においては暗示的知識習得の解明が求められている。そこで、本博士論文においては、これまでの研究と異なり、Sentence Repetition (英語を一文単位で聞き復唱するタスク。以下 SR と記載) というタスクを用いることによって、日本語母語話者の英語名詞句の習得を調査した。SR は、音声のみを使用していること、受容と産出の両方の能力を要すること、処理に時間的制約があること、意味処理・統語処理の両方を必要とすることから、第二言語習得研究において暗示的知識の習得を測る手段として近年注目されているものである。本研究の結果には、先行研究結果と一致する部分と相違する部分があり、相違の1つの理由として、本研究では SR における言語の暗示的知識が測られたことが挙げられる。本研究は、学習者の暗示的知識の側面から英語名詞句の習得にアプローチした点、そしてそこから新たな知見を得た点で、高い意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか

本研究は、Study 1, Study 2, Study 3, Study 4 の4段階に順序立てられている。Study 1 においては、修飾語の位置 (前置と後置) ならびに動詞要素の有無を変数とした4種類の名詞句の習得を、日本語母語話者を対象に SR を用いて調査した。Study 2 では、Study 1 で使用した名詞句について、その名詞句の文中の位置 (主語と目的語) による復唱率の違いを調査した。この2つの研究から、習得に困難をもたらす要因として明らかになった「後置修飾」と「動詞的要素」を含む名詞句として関係節の習得に焦点を当てて調査したのが Study 3 である。Study 4 では復唱パターンについて質的分析を行っている。こうした手続きは、第二言語習得研究の手順として妥当なものである。また、SR を用いた調査と分析が第二言語習得研究において妥当である点は、前述のとおりである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか

本博士論文においては、理論的枠組みと関連する先行研究を踏まえて周到な検討を経て作成した研究資料を用いており、そこで得られたデータの分析方法も適切なものである。特に、① SR を用いて名詞句の習得を調査する際に、名詞句が文中で置かれる位置による復唱率の違いを、文全体の復唱率と名詞句部分の復唱率の両面から調査・分析している点、②量的・質的の

両面から詳細な分析と考察が行われている点、③量的分析においては、名詞句の種類や名詞句の位置による復唱率に含意的関係 (implicational relationship: ある構造を習得していれば別の構造を習得しているという関係が成り立つか) についても分析している点、④質的分析においては、各文の復唱を五段階に分けて、学習者個人内の復唱パターンについて詳細な分析が行われている点、が評価できる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究によって得られた結果に対しては、理論的基盤、先行研究における各種仮説、および本研究における仮説およびリサーチ・クエスチョンに対応した適切な考察がなされており、そこから得られた結論も妥当なものである。また、本博士論文における関連する砂田氏の研究は、論文として国際誌ならびに国内学会誌に掲載されており、本博士論文ならびに一連の研究は十分な学術的水準に達している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

第二言語習得において重要な名詞句の習得を SR の手法を用いて調査し、新たな知見を得た本博士論文は学術的に高い意義を持っている。また、砂田氏は、関連する研究において SR におけるさまざまな要因 (文の長さ、ポーズの有無、音源再生速度) が復唱率に与える影響を多面的に調査しており、そこで得られた知見を取り入れながら名詞句習得の研究を行っているため、本研究の結果は、SR というタスクの妥当性・信頼性を検証する研究の知見としても高い意義を持っている。すなわち、本研究は言語能力の測定・評価の研究としても高い価値を有するものである。

第二言語習得研究の面からは、本研究の結果は英語の名詞句習得を暗示的知識の面で明らかにした点で大きな意義を持っている。教育への示唆としては、本研究の成果は、英語指導者に日本語母語話者の英語習得に関する理解を深める知見を提供するとともに、本研究で用いられた SR による習得調査手法を用いて学習者の英語習得を測ることを可能にする意義がある。さらに、言語能力の測定・評価研究の面では、SR の妥当性・信頼性、そして SR におけるさまざまな変数が復唱率に与える影響について有意義な知見をもたらすものである。

以上のことから、本博士論文は、本研究科の趣旨に合致するものであり、博士 (教育学) の学位を授与するに値する内容を備えたものであることが認められる。